

乳幼児期の防災教育と ESD に関する研究

—環太平洋地域における SDGs を踏まえて—

The Research on Education for Disaster Prevention and ESD

—On the basis of SDGs in the Pacific Basin—

人間発達教育専攻 教授 名須川知子
(NASUKAWA Tomoko)

乳幼児期の防災教育を ESD と関連して捉える際には、自然のもつ脅威と恩恵の両面から検討することで、自然とのつきあい方について経験をとおして獲得していくことが重要である。第1年次は、実態調査から、体験をとおして自然への意識を高めるニュージーランドでの多文化共生、記録方法等の工夫による実効性のある自然の捉え方、また、台湾での国家主導での防災教育プログラムを実践している状況を明らかにすることが出来、その根底にある、防災意識の向上を含めたあり方が示唆された。第2年次は、わが国における ESD と防災の関連から、これまでの研究を踏まえて本学附属幼稚園での実践をとおして、具体的な事例に基づいた検討を行った。また、今年度は予想をしてなかった COVID-19（以下、コロナ感染症）が世界的に蔓延し、この「災害」への対策も含めて、報告する。

キーワード：乳幼児、防災教育、ESD,SDGs、自然への畏怖、コロナ感染症

Key Words : Young Children, Education for Disaster Prevention, Education for Sustainable Development, Sustainable Development Goals, Awe for Nature , COVID-19

（1）はじめに—わが国の乳幼児期における ESD、SDGs についての先行研究

今日、様々な場面や場所で「ESD-SDGs」という言葉を耳にする機会が増えている。ESD とは Education For Sustainable Development の頭文字を取った言葉であり、現代社会が抱える様々な課題を自己の問題として捉え、その課題解決に向けて総合的に学習する教育のことである。一方、SDGs は Sustainable Development Goals の頭文字を取った言葉であり、2015 年に国連主導で策定され、「誰一人取り残さない(no one left behind)」のフレーズを念頭に、世界から貧困を無くすことと、現代の「継続性が乏しい社会・経済・環境」を

「持続可能な社会・経済・環境」へと変革するために求められる目標や活動内容が示されている。つまり、「ESD-SDGs」とは国際的な活動目標を意味する SDGs と、これら活動目標を達成へと誘う具体的活動、中でも、教育活動を指し示す ESD とを包含した言葉であると言える。

翻って日本においても近年、乳幼児期から老年期に至るまでの ESD の取り組みに対する検討が増加しつつある傾向が見て取れる。プロジェクトの性質より、乳幼児期の ESD の取り組みを検討したものに限って概観すればその内容は、第一に、教材に焦点を当て ESD の活動内容を検討したもの（後藤, 2020）、第二に ESD の活動内容そのものを検討したもの（福江, 2019 ; 田宮, 2015）、第三に、日本での ESD を取り巻く現状と課題を検討したもの（加藤, 2016）の 3 点に大別できる。

これら先の研究では、「環境」や「健康・安全」といったテーマが扱われている場合が多く見受けられ、換言すれば、乳幼児期の発達段階に適したテーマであるとも言えるだろう。特に、「環境」を扱った研究では園内のビオトープ等の環境構成に着眼するといったミクロの視点から、地球規模での天災や災害を扱うといったマクロの視点に至るまで検討内容が多岐に亘っていることがうかがえた。ただ、ミクロの視点とマクロの視点とを複合的に関連させながら ESD に迫ろうとした検討、謂わば、自然による恩恵や天災や災害よってもたらされる脅威から生起する新たな価値創造に保育実践はいかに寄与し得るのか、そこに集う子どもたちの意思決定プロセスの過程の様相はいかなるものなのか、さらには、それらを導く方法としてどのような内容が考え得るのか。これら先の研究では見られなかった新たな検討の視点を内包している点で本プロジェクトは独自性があると言え、さらに、目的を達成した際には従来の研究に新たな知見を加えることはもちろん、今後の日本の幼児教育において ESD の新たな指針となり得ると考える。

（２） 附属幼稚園での ESD 実践事例検討会から

幼児教育における ESD と防災の関連性について数回の検討会を実施し、その議論の過程から、まず、幼児期には、しっかりと自然というものを幼稚園での遊びや生活をとおして実感することではないか、ということが話しあわれた。そこで、3～5 歳児の各学年の自然との関わりのある遊びの展開と附属幼稚園でのさらなる自然体験のためのビオトープの設置の計画がなされることとなった。以下、その内容を報告する。

3 歳児の事例

事例 1 「もっと大きくなあれ」	3 歳児	5 月 10 日
3 歳児 2 名が裸足で土山に登っていく。頂上に着くと二人で立ち上がる。A 児は靴を履いて土山に登る。ずるずると滑りながら登ると登り切り、頂上でバンザイをして喜んでいる。その後お腹で滑りながら降りていく。再び B 児が土山に登り、頂上からお尻で滑ろうとする		

がなかなか滑らない。教師が「これお尻に敷いたら滑るんじゃない」とB児に玩具を渡す。もう一度、山の頂上から滑る。

次に玩具で土をすくうと土山の横に土を流す。もう一度すくって流し「山」と言う。「ほんと山ができた」と教師が言うとA児が手で土をすくいB児の作っている山の上にかける。土山の側でバケツに土を入れていたC児もバケツの土をB児の作っている山へとかけていく。二人はB児の使っている玩具に気付き、「あれ欲しい」と教師に伝える。教師が玩具を準備するとそれぞれが土をすくい土山にかけていく。A児が「ばしゃー」と言い掛けるとC児も「ばしゃー」と言ってかける。A児が「もっと大きくなあれ」と言う。B児が山を見て「完成」と言うとC児が「完成ちゃう」「もっと大きくしな」と言う。また、土を運んでいるとA児が山の頂上を「とんとん」と言いながら手で叩き始める。叩いた土の上にB児が土を乗せる。A児が再び叩くとその上にC児が土を乗せる。トントんと叩いているA児に「どうして叩いているの」と教師が尋ねると「こうしたら山ができるんだよ」と言う。C児が山に土を掛けると、山の頂上を足で踏み、その後、手で叩いていく。C児が平らにした土の上にB児は土を掛け、玩具で山を叩いていく。それを見てA児が土を山にかけると玩具で山を叩いていく。C児も土を掛けると玩具で山を叩き始める。

事例2 「車輪に土を入れて」

3歳児

5月10日

山を作っていたA児がその場を離れスクーターを持って来る。スクーターから降りるとスクーターが倒れる。B児は倒れたスクーターの車輪に土を入れる。C児も真似をして車輪に土を入れる。車輪に土が山盛り乗っている。B児が車輪を手で回す。乗っていた土が飛んでいく。車輪を回していく。C児はじっと車輪を見ている。見ていたC児が車輪を止めるとまだ残っている土を手で払い、手ですくって土を入れると車輪を回していく。B児はスコップで車輪に土を入れていく。A児も車輪に土を入れていく。3人で車輪に土を乗せると車輪を回し、車輪の土が少なくなると再び土を乗せ、回すことを繰り返す。

事例3 「どろどろ気持ちいい」

3歳児

5月27日

山の下には水の入ったタライがある。そこにC児入ったり、水を叩いたり、かき交ぜたり、流したりして遊んでいる。土山の周りにはタライから流れた水が溜まっている。

タライの水が無くなり、C児がポリタンクでタライにいっぱい水を入れる。タライの中へ入っていたA児はタライから出ると「土を入れる」と言い、タライの中へ土を掴んで入れる。水が濁っていく。「うわー」と言い土山へ土を取りに行きタライの中へ入れていく。

A児は土山へ登り、どろどろになった土を手取る「どろどろ気持ちいい」と言う。両手に持っていた土を一方の手に乗せると「雪だるま」もう一回乗せ「ハンバーガー」と言う。そして、土山の頂上から下の溜まっている水へと走って降りていく。そして水の中から土を取り腕に乗せると「気持ちいい」と言う。

<考察>

3歳児の自然とのかかわりは、まず、幼稚園での土との関係に見ることができた。この3の事例は、いずれも5月であり、幼稚園に入園後すぐに幼児自らがかかわったものである。まずは、土山を征服し、その後、山を大きくするために二人で協力し、その後、その様子を見ていた3人目が加わり、車輪や水との関わりの中で気持ちのよさを体感していくようが見られた。このように自分たちで身近な土にかかわり試行発見して実感する体験こそが3歳児の生活の中でみられるESDだと思われる。

4歳児の事例

事例1 「トンボは弱いから」 4歳児 9月
4歳児より入園してきたA児は、親子入園で、南園庭で虫取りをすることで安定し、そこで同じく虫取りを親子でしていたB児と一緒に虫取りすることが続いていた。A児は、親子でB児が登園するまでB児の分の虫網と飼育ケースを持って待ち、B児が身支度を終わると母親と別れることができた。A児は兄の影響もありいろいろな虫のことは知っていて、他の友達に知らせることがあった。 運動会の遊びでかけっこをしていると、トンボが園庭を飛び交い始めた。A児が「先生、ナツアカネ（トンボ）捕まえてもいい？」と尋ね、教師「いいよ」と伝えると虫網をもってトンボを追いかける。それを見て他の幼児も網を持ってきてトンボを追いかける。 A児はトンボを狙い、網を素早く振ってトンボを捕まえる。網から上手に羽を重ねてもち、羽が気付付かないようにして教師のところに持ってくる。A児「先生、捕まえたアキアカネ」とトンボを見せる。教師「ナツアカネじゃないの？」A児「これは、アキアカネ、これはメスだね」と言う。教師「虫かごに入れる？」と聞くと、A児は「トンボは弱いから逃がさなアカン。死んじゃう」と言って外に放つ。教師「トンボは弱いんだ」と言いながら、A児が逃がしたトンボと一緒に見る。

<考察>

4歳児から入園のA児が自分から教師に話すことはあまりないが、「トンボを捕まえた」という気持ちから教師に話しかけることにつながったのであろう。捕まえたトンボを飼育ケースに入れていると思っていたのは教師で、A児は「何トンボか捕まえて確かめたい」という気持ちがあったのだろう。それを確かめることができたことで、トンボは弱いとわかっていたので逃がすことにつながったのだ。A児は自分が興味のあることで捕まえたとは思っていても、トンボにも大切な命があることが分かっている、それは、捕まえ方や羽の持ち方、逃がし方からも感じることができる。他の幼児は捕まえて飼育ケースに入れ友達に見せたり保護者に見せたりすることで満足しようとしているが、命あるもののかかわりをどうすればよいのか考える場も大切にしていきたい。

事例2 「ヒマワリ、根っこ張ってる」

4歳児 6

月

コロナウイルス感染症拡大防止のため、休園が続き、個人で育てるインゲン豆やヒマワリの種を植える時期が例年より遅くなる。6月17日（水）にインゲン豆の種を植え、6月23日（火）ごろから芽が出始める。

クラスの名前でもあるヒマワリを種から育てたいと思い、一人ずつ自分のポットにヒマワリの種を3つ自入れて、インゲン豆を育てていた自分の植木鉢のそばで育てることにした。自分のヒマワリと思って水やりをすることと芽が出てくる様子がよく見えるようお願い、インゲン豆を育てている横に置くことにした。インゲン豆と同じようにヒマワリも芽が出てくることを予想しながら水やりをしている。3～4日するとポットから芽が出てくるのを見付けると「出てきた」と喜んで水やりをしていた。

インゲン豆は大きく育ち、花が咲き、豆ができたころ7月中旬に植木鉢を持ち帰る。ヒマワリは園庭のリボン花壇に植え替えることを伝える。夏休みの間はみんなに会えないがヒマワリが寂しがらないように、ヒマワリが元気になるように絵を描こうと提案すると幼児が思い思いの絵を描いた。自分が大好きなクワガタやカブトムシを描く幼児、大きく育ったヒマワリを描いている幼児などそれぞれがヒマワリを思って描いていた。

7月28日にヒマワリをリボン花壇に植え替えと同時に札を立てた。すると、降園時に保護者と一緒に絵を見ながら、「自分が育てているヒマワリ」を見ていた。他のクラスの保護者も札を立てていることから興味をもって絵を見て、ひとりひとりが大切に育てているヒマワリを意識してみていることにつながっていた。

夏休みの間に、当番の職員が枯らさないようにたっぷり水やりをした。

夏休み明けに9月1日に登園するとヒマワリの花を咲かせている幼児は「僕のが咲いている」と喜んだり、自分の札の立っているヒマワリを気にしたりして登園するとすぐに親子で見ていた幼児もいた。また、登園するとすぐに水やりをして、自分のヒマワリにアリが登っていたりハチが花のところにいたりするのを見ていた。

9月4日に来週くらいに大型台風が接近することがわかると他学年の祖父が「せっかくここまで育てたのに、倒れてしまうかもしれない」と心配の声をかけてくださった。クラスの子供一人一人が育てているヒマワリであるが、その声から幼稚園全体のヒマワリになっているのを感じた。

9月7日（月）は暴風警報発表のため、幼稚園は休園になった。ヒマワリは暴風のため、斜めになりながら暴風に耐えていた。

9月8日に登園し、一つのヒマワリだけが花の先から折れていたが他のヒマワリは折れずに斜めになりながらも立っていた。

その後、保育室で昨日の休園の話となった際、「昨日はお休みだった」「警報が出てたから休みだった」「すごい風だったから休みだった」と話になりヒマワリはどうだったかという話になり「〇〇くんのは折れていた」「少し横（斜め）になっていた」ということで身体表現をした。教師がピアノで強い風を吹かせると、ヒマワリの体を震わせながらもしっかりと立っている幼児、すぐに倒れてしまう幼児、足にしっかり力を入れている幼児。足に力を入れ少し広げている幼児に「すごい、このヒマワリ、先生が触っても全然動かない」というと「だって根っこがあるから」と言っていた。

その後、絵具でヒマワリを描く。種を描き、そこから緑の茎が出てヒマワリを描いている幼児、世話をしながら見付けたアリを描いている幼児がいた。

9月17日（木）に敬老の日のハガキを投函したあと、自分のヒマワリと背比べをした。背が幼児より背が高くなっているヒマワリが多かった。

9月23日（水）休日に台風が接近していることを知っていたA児「台風来てる、雲が羊雲の時、台風なんだよ」と話をしていた。教師「台風が来ているけれど、ヒマワリ大丈夫かな？」と聞くと、A児が「大丈夫、根っこが張っていて友達のヒマワリとくっついているから倒れない」と話す。そのことをクラスの話題にすると、身体表現では、土の中で足（根っこ）がくっついていたり、友達の足（根っこ）の間に自分の足（根っこ）を入れたりして表現し、風が吹いても互いを支え合って倒れない身体表現をしていた。

<考察>

長期休業で幼児が実際に世話することができない分、職員が水やりをしたり時には肥料を与えたりしながら、幼児が喜ぶ姿を想像して世話をした。そのことで、休み明けには、子供たちが喜ぶほど大きく育っていた。しかし、台風という自然現象に、もう少しで花を咲かせると思ってたときだったので、どうなることかと心配したが、他学年の祖父も心配しており、子どもと共通の心配事になっていることに驚いた。それは、ヒマワリを植えた場所がどの保護者も見られた場所であったこと、札を立てていることで幼児一人一人が大切に育てていることを身近に感じていたことがよると推測される。

その後、台風の後にヒマワリになって遊んだ時に、風に倒れてしまうヒマワリの中、足に力を入れて踏ん張って倒れないように表現している幼児がいた。それは「根っこがある」と言っていた。根を張って倒れないようにしていることを感じたが今後根を張ることで水や栄養を取ることができることにもつながればと感じた。今後、一つ^の種から花が咲き終わったら、たくさんの種ができることを感じてほしいし、ヒマワリという命のあるものがつながっていることに気付いてほしい。また、ヒマワリを抜くときに、根が張っていることで、倒れないことやヒマワリの茎を触るとチクチクしていることに気付くだろう。なぜ茎がチクチクなのかを感じ、虫などが花を食べたり登りにくかったりするためという、ヒマワリの植物としての特徴に気付く基礎になってくれたらと思う。

このように、4歳児では、実際に感じたこと、観察して気付いたことを言葉や身体で表

現しながら周囲の友達にも伝え、自分が感じた自然環境について深めていく様子を見ることが出来た。

5 歳児の事例

事例 1 「水の方が強い」

5 歳児 12 月 4 日

A 児、B 児、C 児が土山にできたトンネルから、そのトンネルの下側にできた大きな穴に水を流し始める。大きな穴に水が溜まってくると、A 児は水が流れ出さないように、鉄製シャベルを使って、土で土手のような物を作り始める。B 児、C 児は繰り返し、バケツやじょうろで水を流す。D 児も遊びに加わり、A 児と一緒に水が流れないように、土で土手のような物を作る。B 児、C 児はトンネルからではなく、直接、水たまりに水を流し始める。A 児、D 児は土をどんどん積んでいく。しかし、B 児が土の土手の方をめがけて水を流すと、水が土の土手を壊して外に流れていく。一度、水が流れると、どんどん水が流れていく。4 人は「あ〜」と喜ぶような声を出し、笑う。A 児「水の方が強い」、B 児「うん、水が強い」と笑顔で話す。そして、再び、A 児 D 児は土で土手のような物を作り、B 児 C 児は水を流す。そして、土手が壊れると、再び、4 人で「あー」と喜ぶ。これを何度か繰り返す。



事例 2 「今日は、土の勝ちだね」

5 歳児 12 月 5 日

4 歳児の E 児が、土山にできた穴に水を溜めようとしている。水は穴にいっぱい溜まっていないが、穴の端から水が下に流れいく。そこに 5 歳児 2 人がやってくる。2 人は E 児の話を聞くと、A 児が「昨日、水が勝ったから」と言う。教師が「どうしたら水が流れていかないかな」と言うと、A 児「土、置く」と言う。E 児は水が流れないように、昨日、A 児がしていたことと同じように土で土手のような物を作っている。A 児 B 児は水を穴に入れている。途中、A 児は E 児に「スコップでたたいた方がいいよ」と声をかける。さらに、A 児は E 児が作った土手に水をかける。E 児は「やめて」と不機嫌そうに言う。すると、A 児が「こうすると固まるから」と水をかけた後、鉄製シャベルで固めていく。さらに、



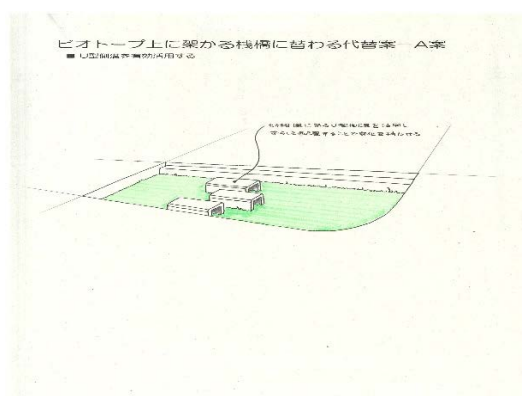
B児はそこに乾いた砂をかけていく。A児「泥だんご、みたいにしたらいから」とE児に声をかける。E児も、A児、B児のしていることや言っている意味がわかったようで、土手を作り、鉄製シャベルで固めていく。A児B児は再び、穴に水を入れていきます。水は穴にたまっていき、流れていかない。A児「今日は、土の勝ちだね」、B児「本当だね」と話す。

<考察>

5歳児の自然との関わりは、身近なものであるが、土と水の関わりについて、どのようにしたら、自分たちの思い描く状況を実現できるか、ということを実験しながら試行錯誤していく様子を見ることができた。そのことを、4歳児の思いと重ねながら、これまでの体験を踏まえて実施している事例である。このような土山遊びの中で大型スコップを利用しながら、ダイナミックに土や水に関わる様子は、小学校になっても生活科や理科教材の基板となり、さらに、大きく自然災害における土や水との関連にもつながっていくものと思われる。

(3) ビオトープの計画と設置

園内の自然環境として、ビオトープの環境の必要性を感じ、設置を実施した（下記の案と写真を参照）。3学期に設置し、水漏れ等のチェックを行い、継続してビオトープを整備していく。今後、水辺が近く的环境ある子どもの遊びの場となることを期待している。



(4) 防災教育としてのコロナ渦での保育の実践

令和2年度は、ESD、及びSDGsの観点から、子どもと自然環境、自然災害等のことについて、主に実践をとおしてその学びのあり方を検討する予定であったが、年度当初から、コロナ渦の下で、これまでの日常なされていた保育そのものが行われない状況になった。

しかし、コロナ渦の中での保育も「災害下としての保育」であり、感染症を防ぐための保育の実践も防災教育の一環としてとらえられると考えられる。そこで、①子育て支援ルーム、②附属幼稚園、③台湾、での保育実践、④ニュージーランドからの意見について報告する。なお、①②は、教育大学協会近畿地区幼児教育部会（令和3年2月15日）で口

頭発表（オンライン）した。

① 子育て支援ルーム「GENKi」での感染症予防

令和2年度のコロナ渦における感染症対策として、子育て支援ルームでは、4月～5月末は緊急事態宣言のため附属学校も休校、基本的に附属幼稚園にあわせて、閉室とした。

その後、令和2年6月1日（月）から再会し、通常通り（月）（火）（木）で時間は、9時～14時としたが、昼食は室内でとることはやめ、飲み物だけとした。さらに、令和3年1月26日（火）から2月中は、緊急事態宣言であること、感染者が増加していることから、子育て支援ルーム独自で期間中は閉室とした。3月1日から現在は、感染症対策をとりながら開室している。開室中の感染症対策としては、大人のマスク着用（0～3歳児未満の子どもはマスクなし）、検温、消毒、密を避けることを方針として、入り口に提示し、受付の動線を見えるようにした。また、保護者の消毒への協力として、各保護者に消毒噴霧器と布を入り口でわたし、常に室内では持参してもらい、子どもがさわったりなめたりしたものを拭いてもらった。体温計、手の消毒用の機器も自動的な使いやすいものを使用した。さらに、スタッフは、30分に1回の換気として窓をあけること、常時、遊具の消毒、机等の消毒をしている。また、利用者の人数制限を設け、1日10組とし、開室当日の9時から電話予約先着順を行い、原則として、午前中は1人の保護者に1人の親としてもらい、一人の保護者に2人の子どもの場合は午後に来てもらうようにした。

次に、感染症防止に伴う設置機器として、新たに空気清浄機、玩具の消毒機器、空気清浄機付きの暖房器を加東市から購入してもらった。特に、感染症対策のための消毒液を噴霧できない玩具等については、紫外線による消毒機器が大変役に立っている。すなわち、フェルトで出来た玩具は、小さくて、なめやすいものであり、この機器により提示することができるようになった。

その他、ボールプールは、数が多いので、時々少な目に出すようにし、木製のボールプールは消毒が困難であるため、今回は殆ど出していない。また、砂場は玩具の消毒が難しいため、申し出のあった希望者のみに使用をしてもらうようにした。さらに、乳児用ベッドの使用や換気が十分できない「ほっとルーム」は、閉室したが、絵本については、換気のよい場所に移動することとした。

このように、多くの制限の中で子育て支援ルームも開室しているが、0歳から3歳未満児の子どもたちは、母親との身体を介したかわりがもっとも重要であり、乳児の発達に寄与していることから考えると、このコロナ渦での育ちについては大変危惧するものである。しかし、母親との一体化として、母子の感染症を何よりも防ぐことを精一杯実施することが重要であると考えている。それは、子育ての孤立を防ぐためにも必要なことであり、今後は、その観点から子育て支援ルームから発信するオンラインの活用し、3月中旬に試行することを計画している。

② 附属幼稚園での感染症予防

今年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、緊急事態宣言が発令されている中でスタートとなった。まず、附属幼稚園では、「コロナ禍における感染防止対策」として、薬剤師から、保育室の消毒とトイレの消毒について、消毒液や消毒方法の指導を受けると共に、園医や大学保健管理センター長に相談し、各保育室の換気や室温管理状態をチェックしてもらった。また、その内容を、「ほけんだより」に掲載し、幼稚園と家庭とが連携した感染防止対策ができるよう、その理解と協力を保護者に求めた。

4月、5月の休園中には、幼稚園再開後に家庭から幼稚園への円滑なスタートができるよう、在園児の保護者のみ閲覧できる特設サイト（マイクロソフトの Sway）を利用して、園の様子を配信すると共に、自宅で親子が楽しんで遊べるよう、年齢に応じた教材も送った。

休園中も開室していた預かり保育では、登園前の検温と手指消毒など感染防止対策を徹底して受け入れていた。

6月に園が再開された後は、コロナ禍の中でも保護者が参加できるように行事の見直しを行った。その際に気をつけた事は、ねらいと目的は変えずに開催できる方法と、やむなく中止にする行事を全職員で検討した。

まず、誕生会は、誕生月の園児の保護者の参加は維持したまま、密を避けるために、園全体で開催していた誕生会をクラスごとに実施した。運動会は、多世代交流の場として、祖父母から地域の未就園児まで参加していたが、園児とその家族のみとして学年ごとに実施した。その様子を全学年が共有できるよう、後日、Sway にて動画配信もした。陶芸教室については、公共交通機関を利用して大学に行っていた為、感染のリスクを避けるために、本園に大学の先生を招いて実施した。

次に、密を避けるため、幼稚園業務をオンラインで行うことにも挑戦した。新入園児保護者へは、Zoom による入園説明会と Forms による用品販売を実施し、在園児保護者へは、Forms による幼稚園アンケート調査もした。保護者からは、「自宅に居ながら説明が聞けるため、家族で参加できる」「時間を気にせず回答ができる良さがある」などの感想があった。

さらに、教育実習については、実習時期を変更し、食事場所を配慮するなど、感染防止対策を徹底した上で受入れた。また、園児の保護者へも手紙を配付し、学生の受け入れに理解と協力を求めた。

このように、コロナの影響で例年とは全く違った園生活を送った1年だったが、保護者からは様々な感想が寄せられました。「降園時間にクラスの保護者が集まり、先生方からその日の子供の様子を聞いていた時間が無くなり残念に思っていました、その分、子供と話す時間が増えました。昨年までは、先生から聞いているから、わざわざ子供から根掘り葉掘り聞く必要もないと思っていたのですが、今年は、子供から話してくれる幼稚園の話題が新鮮で、『それで、それで』と、親の方も真剣に聞いていると、子供が色々なことを話してくれるようになりました。父親も帰宅時間が早くなり、お風呂の中で、ダイニングで、家族で話す時間が増えました。」「クラスでの誕生会は、身近で温かい雰囲気良かった。昨年の2月以降、クラスの子ども達とも会う機会がなく、親も寂しい気持ちがあったが、今回『うれし

のタイム』で、子ども達の成長が見られたのが一番嬉しかった。コロナで園に入れなかった期間も、しっかり年長児としての成長をしてれていたことは、先生方の関わりの素晴らしさだと思い感謝の気持ちでいっぱいです。」

以上のように、コロナ禍をデメリットに捉えるのではなく、コロナ禍だからこそ社会全体で何ができるのか、どう変化させていけばよいのかを考えるきっかけになったことが窺える。

③ 台湾での防災教育の実態とコロナ禍での防災（翁麗芳氏から）

少子・高齢化進む中、台湾教育部(日本の文部科学省相当)は新・幼稚園教育と保育要領(2017)の推進とともに、様々な時代的なトピックスの参画を幼稚園や保育者に強く要請している。防災教育はもちろん、食農教育(食べ物と農業のかかわりの教育。日本の食育教育に相当)、環境教育(ESD)、性別平等教育(性における差別、暴力を無くし、多元性別)、STEM教育などである。社会の変遷は幼児教育実践の場でも反映していると言えよう。一方で、COVID-19 コロナ・新型肺炎の発生で、ウィルス災害の恐ろしさを改めて教えられた。

こうした時代状況を背景に、私が身近に見ていた国民教育幼児学級、健康促進幼稚園と防災教育の3つの幼児教育政策を取り上げて、2020 コロナの年で幼児教育と社会のかかわりを考えたい。

・国民教育幼児学級

国民教育幼児学級(通称国幼班)は2005年に発足した原住民地域または離島にわたる、5歳児対象の無償プラス手厚い保育サポートシステム幼児教育政策である。15年たった今、同政策は5歳児幼児教育無償化政策に転じ、全国に普及しているが、質の高い教育と保育を確保するための日々巡回指導を行う地方指導員と、月1回入園指導をする専門家(大学幼児教育学科教員)がいる。派遣先は国民教育幼児学級、すなわち原住民地域と離島に限るが、保育の質向上の指導の特別支援政策として実施されている。私は専門家の1人として台中市の訪問指導担当を務めている。毎月1回、地方指導員の車で、都心からまた道1.5-3時間の和平区にある8つ幼稚園を毎回1園で、10年間続けて視察している。コロナ感染症に防疫措置を取り始めたのは2月上旬、冬休み中であつた。防疫対策模索する余裕を持たない中、2月11日の始業の時間が迫るところで、教育部は第2学期2週間延期、2月25日までの2週間は各学校機関においては、学生登校前、コロナウイルス防疫の準備期だと宣告した。

日本を含めた先進諸国に比べ、上に述べた通り、2020 コロナ感染に台湾はかなり早い段階で準備作業を進めていた。コロナ禍の緊急対応期といわれる3月では、国幼班についての巡回指導は実際の入園を中止、オンライン指導で行っていた。4月に入ると、台湾における防疫の好成果は大きく宣伝され、いろいろな場所では日常に戻っているようであるが、気を緩めてはいけなと政府からは呼びかけ続けていた。各地における国幼班の実地巡回指導作業は再開となり、私は4月16日と5月12日に、台北から高速鉄道電車で台中市国幼班

に出かけ、午前は園の実践を観察、午後は国幼班連合検討会を開催した。私の訪問日の午後1－2時は連合検討会を行い、園のできごとや問題などをみんなで話し合うことは定例行事である。会議の効率を配慮して、毎月の検討会は1か月前から一つのテーマを決め、4～8人の出席者に順番に自園の実践を発表してもらう。4月も5月も“コロナウイルス防疫の中の子どもの保育のあり方”を検討会のテーマにし、2回にわたって、8つの園がそれぞれの防疫トラブルと防疫教育の取り組みを話し合った。当テーマの決定には教育当局から頻りに下った防疫措置と、子どもたちみずからの健康保護意識強化の要請があったわけである。検討会では保育者たちはそれぞれコロナウイルス防疫と保育実践の主題との織り込みを熱烈に語った。検討会の招集者、また国幼班の指導者として、私はコメントと励みのことばを送ったが、心の底には疑問を持っていた。単純に山の保育者たちは徹底的に疫病感染防疫策を推進していると言っていいだろうか。または国の資金で成り立った国幼班であるので、「公務員として政策執行」の流れに過ぎないであろうか。保育者の本当の想いは何だろうか、子どもたちはいつも変わらない様子を見せているが、こうした防疫生活の中、子どもの教育と保育はどう影響されているのだろうか？

国幼班政策は発足した最初から、衛生面についてのよい生活習慣を養うことを重要な保育目標の一つと設定しているが、原住民族は一般的に衛生や健康管理は弱いと思われる。都会の住民に比べれば、山奥在住の原住民族はおおざっぱで、衛生や清潔の面では比較的に気にしない傾向である。一方、原住民族国幼班は山奥にあるので、疫病感染には一番安全の地域だと思える。言い換えれば、国幼班は原住民族の子どもに対して質の高い教育と保育を無償で提供する誇らしい政策でありながら、幼稚園という建物に閉じ込め、森や自然の中の自由の生活と遠ざけている。コロナウイルス感染から本当に守ってあげているか、または災害を隔離しきれないまま、自然とは縁切られてしまっているか？課題である。

・健康促進幼稚園

台湾の国民健康署は衛生福利部の所管であり、2018年に「視力保健」、「事故防止」、「飲食栄養」と「健康フィットネス」の4つの重点で幼児健康促進モデル園プランを発足した。

はじめは6つの幼稚園で「子どもの健康政策」、「子どもの健康スキルと行動」、「親との交流と地域の資源」の3事項を試行して、次のような望ましい成果を収めた。すなわち、家中子どもは30分以上3Cを使用することは3割下げ；子どもにおけるぶつかり合いと転倒事故はそれぞれ平均7割、9割下がるようになった。バランス的な食事は増加する一方、親と保育者の栄養や健康についての知識能力はそれぞれ45%と30%成長；週に2回以上の親子運動について、親は7割に成長、子どもにおける体の安定力は20%向上である。

その後、2020年に衛生福利部と教育部と合同して、新北市、臺中市、嘉義市、臺南市、高雄市と花蓮縣の6つの地方自治体と、合計100以上の試行園で健康促進幼稚園政策を推進するようになった。教育管轄部門の教育部と健康福祉管理の衛生福利部、国的レベルで子どもの健康行為促進を策定、幼稚園の保育プログラムに介入する。子どもに健康的な暮らしを

提供する芳しいプロジェクトと評価されている。

・幼稚園における防災教育

まだ2年経過していない幼児健康促進モデル園を見て、2014－2017年に私が携わっていた防災モデル園プロジェクトを思い出す。地震、台風、土石流などの災害頻発の台湾であるので、防災教育の重要性は見過ごしては行かないため、2014年教育部は「幼稚園防災教育実験研究開発試行プロジェクト」で全島2園を防災教育実験幼稚園と進めた。そのあとの2年は10と12園で、合計24の防災モデル園を築いた。台湾には首都の台北市や直轄市の新北市、台中市など22の市県がある。幼稚園防災教育モデル園計画では、22の市県に各1園以上のモデル園を設定し、防災教育の推進を目指している。そしてそのモデル園を核に周辺の幼稚園への普及・拡大を意図としている。24のモデル園作ってから、2018年に教育部は中央政府におけるモデル園作り戦略は階段的終了、幼稚園や各学校における防災教育の推進は各地方自治体に任せると意向を示した。22の市県では小、中学校対象とする防災教育指導団を設けているが、幼稚園は対象外であった。首都の台北市は2014年に防災モデル園を毎年6～10園を設けているが、主に地震避難訓練の指導に集中している。新北市の防災教育指導団は2019年から幼稚園をも指導の対象に入れている。他の20市県は財政や人材の問題でまだ動いてないようである。

・台湾における幼児教育の原点としての防災

原住民族国幼班でも、健康促進幼稚園でも、中央から打ち出した子どもの教育と保育政策である。国幼班は15年の業績があり、原住民族や山岳地域の子どもの教育を重要視している立派な証拠とみられている。健康促進モデル園は実施2年目で、拡張していく勢いである。よく言うなら、やっと就学前段階教育注目が到来、悪くいえば、上から下に押し付けた政策は形骸化に落ちる恐れが目に見える。

30年以上も台湾の幼児教育に携わっている者として、2020年、コロナの年といわれるこの年で幼児教育の意味をふりかえるようになった。日台それぞれ近代幼児教育を作り出した先駆的な人物、倉橋惣三（1882-1955）と張雪門（1892-1973）の幼児教育論を思い出す。同時代で異なる土地で子ども中心の幼稚園課程の築く人物である。倉橋惣三は、幼稚園課程での「生活を生活で生活へ」という名言を残し、張雪門も子どもの日常の暮らしを重視し、生活実践すなわち学びという行為課程論を立てていた。あそび、そして人と自然、人と人のふれあいは倉橋惣三と張雪門はともに大事にしている幼稚園課程の軸である。しかし、台湾がコロナ防疫に素晴らしい成果を収めたのは、人と自然、人と人のふれあいを断ち切ったためである。短期間で目標達成したい政策として、上から人的と物的資源、そして明確な指標つきで強力推進すれば、成功につながる。台湾の原住民族国幼班はその一例ではあるが、幼児教育の先駆者である倉橋惣三と張雪門が提示してくれた生活や自然の大切さを考えると、課題であると思われる。子どもの成長と社会の健全な持続的な発展を考えると、持続可能な

環境（ESD）、地震、台風などの災害対策の現代社会のトピックスの中、やはり持続可能な環境（ESD）——人材育成と自然存続のできる社会での人的および物的環境づくりへの課題は我々にとっては一番の重要なことであると考えます。

④ ニュージーランドから（J. Ritchie 先生から）

ニュージーランドは、昨年度の実地調査からも大変自然環境に関連した保育内容が充実している。また、教育全般にも周囲への自然へのかかわりも重視している。それは、ニュージーランドの多様性の考え方にも関連しており、特に先住民であったマオリ族との関係からも影響している。すなわち、マオリの人々はニュージーランドにおいて、自然環境の中で自らの生活を開拓し、現在でも自然を重要視する考えは変化していない。また、その考え方を継続するように常に努めていることがわかる。このマオリ族を中心としたニュージーランドの政策、教育制度の捉え方の中で、自然は地質学的環境にいる生き物や無生物に影響を与える自然のシステムが複雑に重複したものであり、「災害」は、人間の力が悪影響を及ぼしていることを自然の中に見出すべき人間が作用したものであると考える。人間は、現在、化石燃料由来の炭素を大気中に放出することで、これらの負の自然の力を加速しており、地球温暖化と気候の変化を引き起こしており、また、広大な野生空間を破壊し、汚染することで自然界への悪影響を及ぼしているのが現実であると思われる。将来、人間が、自然の影響について取り組むためには、幼児期の教師とすべての教育者が人間の自然の影響に取り組むことが重要であろう。私たちは、人々の自然界にふりかかった「災害」を再概念化することが出来たのは事実である。

（5）おわりに

以上、今年度の研究から、ESD をめぐる防災教育というテーマで保育実践の検討、乳幼児期からの防災教育として、コロナ渦での実態についてまとめた。研究目的は、体験をととした自然への感性を培い、そのことを基底とした防災教育訓練を実施すること、そして、同じく自然災害の多い環太平洋地域の主に、台湾、ニュージーランドの2つの国の乳幼児期の防災教育を参考にして、討論する予定であった。

今年度計画の附属幼稚園における子どもと自然環境の関わりを ESD の観点から考えることは、実際の事例を中心に検討することが出来たが、台湾、ニュージーランドからの招聘による国際シンポジウムの開催はコロナ渦のため、かなわなかった。しかし、ニュージーランドの Ritchie 先生とは、日本乳幼児教育学会（2020 年 11 月）の基調講演にて、名須川が司会を実施し、マオリ族と自然環境、現在の ESD 教育に関しても意見交換をすると同時にその後のメールでのやりとりでその課題について、深めることが出来た。また、台湾の翁先生からは、同報告にあるように、寄稿していただくことができた。

さらに、ESD と SDGs の関連については、現在開発されている ESD rating scale (2ed.) 附属幼稚園の検討会で世界 OMEP（幼児教育機構会議）が開発していることについて、

OMEP 日本委員会の ESD スケールプロジェクト (名須川主担) が翻訳している教育指標について紹介した。その内容によると、ESD は環境だけではなく、社会文化的、経済的な側面を有しており、SDGs と重複する内容が多く含まれていることが明らかとなった。また、それは、ESD について、PDCA における Check 機能として、このスケールが果たす役割は大きいのではないか、という示唆を得ることが出来た。

今後、乳幼児期の自然の実体験を基底とした保育を ESD の中で捉え、自然との共存としての災害への備え、訓練を継続し、SDGs にもつなげることで持続可能な方向性を保育・幼児教育の中で位置づけることができるように、さらなる検討が必要である。

【参考文献】

- 福江厚啓 (2019) 保幼小接続期における協同性についての一考察. 北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要, 12. 17-29
- 後藤由美(2020) 「子どもの健康と安全」における乳幼児の事故防止につながる安全教育教材の実践：保育施設における ESD・SDGs 活動の一環とした安全教育に着目して. 瀬木学園紀要, 16. 63-69
- 加藤望 (2016) 日本の乳幼児教育・保育における持続可能な開発のための教育(ESD)の現状と課題. 愛知淑徳大学論集 福祉貢献学部篇, 6. 88-96
- 田宮縁 (2015) 幼児教育における ESD の意義と可能性：ユネスコスクールの実践の検討. 静岡大学教育学部研究報告 教科教育学篇, 47. 57-66
- 富田久枝、名須川知子他 (2018) 持続可能な社会をつくる日本の保育－乳幼児期における ESD かもがわ出版
- 西井麻美他 (2020) ESD がグローバル社会の未来を拓く－SDGs の実現をめざして ミネルヴァ書房
- Jenny Ritchie(2013) Sustainability and Relationality Within Early Childhood Care and Educational Setting in Aotearoa New Zealand. IJEC,45.307-326
- Jenny Ritchie, Iris Duhn(2014) Making "ECO-Waves" :Early Childhood Care and Education Sustainability Practices in Aotearoa New Zealand. Children, Youth and Environments,24 -2,123-145